

特別寄稿

山形の子どもたちの、明るい未来のために

株式会社日本標準 代表取締役会長
山田 雅彦

1 日本標準と山形教育用品の歴史

(株)日本標準は、昭和25年創業の教育出版社です。

創業者の石橋勝治は、岩手師範卒の小学校教師でした。戦前、戦中、戦後にまたがる19年間の教師時代には、子どもたちに学習の目標を問い、議長を決め、学習方法も討議させる授業実践を進めました。学級自治の経営と言われていています。(この実践は、今話題になっている「アクティブ・ラーニング」そのものと言えるでしょう。)

その教育理念を、出版活動を通して貫くため、日本標準を創業したのです。



日本標準本社ビル

2 私と「山形教育用品」との出会い

私が、初めて山形を仕事で訪問したのはいつごろだったでしょうか…?

ちょっと計算してみると、少なくとも30年以上前です。おそらく用件は「意見聴取会議」。

私は日本標準に入社以来ずっと、国語の編集を担当していました。そして国語の課長になってからは毎年この「意見聴取会議」に参加するようになったのです。各教科の課長が、山形教育用品の各支店を担当して、この意見聴取会議に参加するシステムになっていました。私の最初の訪問先は「庄内支店」でした。

会議の前には学校訪問です。教育用品の社員さんと一緒に回りました。最初に私と一緒に回ってくれたのは、現在庄内支店長の富樫さんです。学校訪問の合間の車の中で、ずっと教材づくりについて質問されたのを覚えています。

それからは、毎年山形に来ては、学校を訪問し、意見聴取会議を開きました。山形支店や置賜支店でも会議に出席するようになりました。

3 私を育ててくれた、意見聴取会議

この会議が、編集者としての私を育ててくれました。先生方は、それはもう、とにかく熱心でした。まず教育そのものに熱心でした。毎日の授業に真剣でし

た。私たちが作った教材についても、実に厳しくご指摘とご指導をいただきました。厳しいのは当然です。先生たちは、教師生命をかけて教材研究にも取り組んでおられたのですから。

その熱心な会議の中には、日本標準と先生方との、作り手と使い手としての信頼関係がありました。そして何よりも、この両者を取り持っている山形教育用品の一人ひとりに対する先生方の強い信頼が、この会議を支えていました。

4 先生は、そして子どもたちは

今学校は、先生は、子どもたちは元気でしょうか？日本標準教育研究所(NPO)での調査では、今先生方は「多忙感」に押しつぶされそうになっているようです。ICT教育、新しい学力観への取り組み、道德の教科化、小学校英語の教科化への対応、ネット時代の情報モラル等々、課題は山積です。

5 「人格の完成」に向かって

そんな中、全国そして地域の教育を支える私たちの仕事は、ますます重要になります。

教育の目的は、「人格の完成」(教育基本法)とされています。

次代を担う子どもたち一人ひとりが、自分の存在が尊重され、他人の存在を尊重できる人間になっていくように、これからも山形教育用品の皆様と力を合わせて、学校現場をサポートしていく所存です。子どもたちに明るい未来をバトンタッチするために！



統合物流センター